郷土室だより

第 40 号

昭和58年6月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543 - 9025

切絵図考証 二七ア

安藤菊二

第30 木挽町六丁目・七丁目

旧木挽町六丁目は現在の銀座七丁目一四番地から一八番地にわたる地域、旧木挽町七丁目は、現在の銀座八丁目一四番地から二〇番地の地域である。

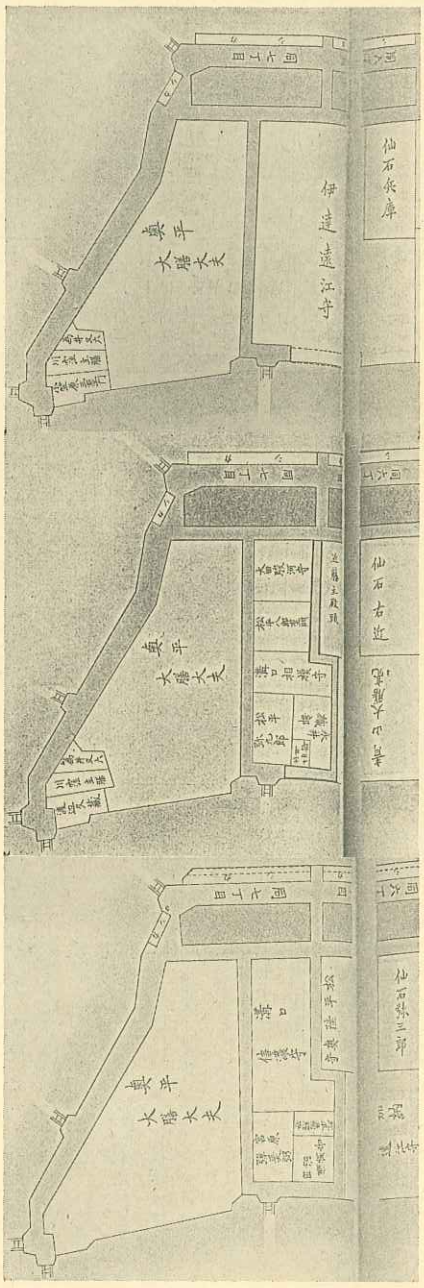
この地域では、仙石右近、伊達遠江守、青山大膳亮、加納遠江守、溝口侯、宮原大膳大弼、奥平大膳太夫の諸家について記す。

○仙石右近（兵庫）

『御府内沿革図書』享保年中（1716～1735）

寛政年中（1789～1800）

文政十一子年 天保七申年（1828～1836）



六丁目の武家地は、享保年間図によると、地区の大部分は伊達遠江家の邸地で、五丁目の柳生家に隣接して、仙石兵庫の邸地を記し、寛政年間図では仙石右近となっている。

仙石家は家祖久隆より起る。久隆は仙石越前守秀久の七男で通称は弥兵衛、また右近といった。慶長九年一一才の時家康にまみえ、秀忠の側近として勤仕し、のち兄丹後守某の采地上総国武射郡および上野国の内三千石を賜る。一三年従五位下大和守に叙任、寛永一〇年甲斐国において千石を加恩すべて四千石を知行することになった。

正保二年五月五二才で没し、江戸下谷養源寺に葬る。（寺はのち駒込に移り、仙石家代々の葬地となった。）

久隆の後、久邦―久信（ひさ）―久治―久住―久当（まさ）―久功（よし）―久徳（のり）と継いだ。代々右近また兵庫と称し、御小姓組番頭に進んでいる。

七代目の久功（右近）は寛政元年四月家を継ぎ、采地四、七〇〇石を領し、同四年御先鉄炮の頭となり、七年一二月小普請支配に転じた。久功の後は間部下総守詮茂の三男詮弾（あつただ）がつぎ、久徳と号した。

寛政重修諸家譜の記載は以上で終るが、安政六年武鑑には

御小普請支配　仙石右近久祗　父山城守、四千四百石、木挽町六丁メ、嘉永七寅正月より

と載っている。

○伊達遠江守屋敷

伊達家の邸地は、元高田城主松平越後守光長の邸地であった。天和元年（一六八一）六月、幕府は越後騒動を断罪、同家を改易、伊予松山に流刑に処した。

この事件で木挽町の邸地は没収されて宇和島藩伊達遠江守に賜与された。

「藩邸沿革」宇和島藩伊達家の項に

一、中屋敷　木挽町六・七丁目

拝領、天和元年、上地寛政五年十二月、坪数壱万三千七拾五坪、

天和三年地図ニ載ス（蓋、天和元年六月松平家改易邸地没収後賜ハリシモノナリ）（中略）

郡上藩青山家旧記、寛政五年十二月十六日木挽町伊達遠江守下屋敷之内三千五百七拾弐坪余被二下置一候、云々。（市49―六七五頁）

と記されている。

この伊達遠江守の屋敷は、寛政五年一二月上地を命ぜられ、邸地は割屋敷となり、

近藤主殿頭、太田摂津守、松平八郎左衛門、溝口相模守、松平弥九郎、出井十四郎、永井織部、青山大膳亮などの屋敷となった。

太田摂津守は御旗奉行で一、三三二坪を拝領し、青山大膳亮は、三、五七〇坪を拝領したのである。

○加納遠江守

前記青山大膳亮の屋敷は、文化元年八月一六日に加納遠江守が拝領した。坪数は三、五七二坪であった。

上総一宮藩主で禄高は一万三千石。幕末の頃は久宜が主人である。『列藩要鑑』に

加納氏は平左衛門久利を以て中興の祖と為す。久利は駿河の人なり。初め徳川氏に仕へて旗士と為る。慶長八年徳川頼将（おもりゆく）の傅となり、千石を食む。享保元年其子角兵衛久政千石を加増して近侍となる。十一年侯籍に入る。寛政八年上総一宮に移治し、子孫世襲す。明治二年六月一宮藩知事に任ぜらる。

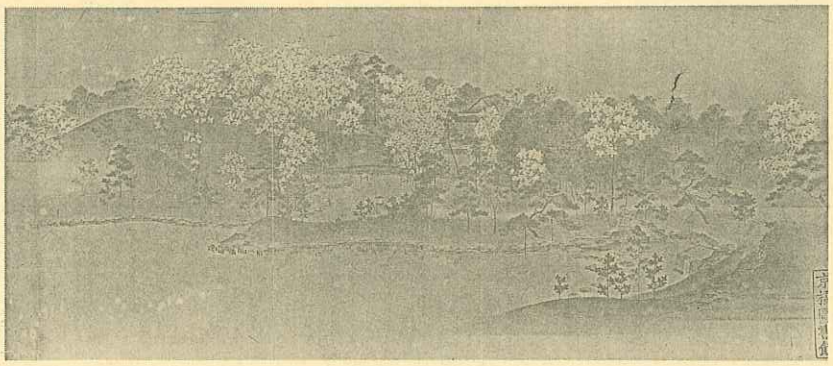
と記し『藩邸沿革』に、年録を引いて

文化元年八月十六日馬場先御門内屋敷御用ニ付、家作共可二差上一候。木挽町青山大膳亮屋敷家作共被レ下レ之。伏見奉行加納遠江守。

と記す。

○溝口侯中屋敷

寛政五年一二月一六日、前記伊達遠江守上げ屋敷内一、五九八坪余を溝口直奮が拝領した。溝口侯は越後新発田藩主である。文化九年には、近隣の、亀井能登守、松平主計頭、太田彦十郎の屋敷地を併せ、新に園池を開き偕楽園と称した。偕楽園のことは、第五号（四九年七月号）に記したので、それを参照せられたい。



偕楽園『東京市史稿遊園篇第3』

○宮原弾正大弼

宮原氏は、幕府の儀式典例を掌ることを役職とする高家であった。家康が門閥の後裔を尚び、この職に補したのが初りで、寛政の頃には高家十五家、表高家十六家を数えたという。

幕府の儀式典礼を掌る役に奏者番という役があるが、この方は武家に関する典儀を主とし「高家は、勅使院使の摂待、禁裡代参の如き、禁裡公家に対する儀式を掌る。其他年頭賜杯の時、三家国持家以下四品以上大名の給仕、伊勢大廟及日光廟代参等種々の典儀を掌れども、勅使院使の接待、年頭賜杯の給仕は、高家管掌の職に於て最も緊要なるものなり。」と、松平太郎氏の名著『江戸時代制度の研究』（三二二頁）に説いてある。高家には、単に高家と称するものと、表高家と称するものの別があり、官位を有するものを高家と呼び、然らざるものを表高家と呼んだ。

高家が主役で、表高家は高家の補助役だったのである。しかしながら四位相当で、白むくを着することを許されていたと、前記の書にある。なお同書には、宮原氏について、

「宮原氏は足利左兵衛督高基が嫡晴直に起る。大永五年管領の職に補せられ上杉を称す。鎌倉山内に住めり。後、職を免ぜられて古河に住み、又

上総宮原に移る。孫義照東照公の上命によりて下野足利を領し、千百四十石を賜ふ。初めて宮原を称す。其子義久無官の高家となり、子孫遺迹を襲ぐ。

と記している。

○奥平大膳太夫

奥平侯邸は、現在の銀座八丁目九番地から二一番地にわたる地域を占めた大邸で、寛永の頃から明治維新にいたるまで、この地を上屋敷として使用した。奥平侯について『列藩要鑑』の記す所は次のごとくである。

中津藩　（豊前中津）

奥平大膳太夫昌服　十万石

奥平氏は美作守貞能を以て祖とす。永禄の初貞能三州作手城に居り、制を今川氏に受く。今川氏の亡後徳川家康に属す。元亀三年款を武田氏に通じ、其子信高と共に武田氏に属して三州長篠城に居る。天正元年武田信玄卒するに及び、貞能父子、後徳川氏に帰し、居城に拠りて武田勝頼の大軍に抗す。後累功を以て徳川氏に信任せらる。十八年家康関東に移るに及び、貞能三万石を以て上州小幡城を賜ふ。慶長三年貞能卒し信昌嗣ぐ。五年関原の役、後徳川氏濃州加納城を信築して信昌に賜ふ。信昌十万石を食みて、之に居り京都守護職となる。嫡子家昌別に野州（ママ）十万石を賜り、宇都宮城に居し、十九年卒す。其子忠昌其封を襲ぎ奥平氏の嫡宗となる。元和五年一万石を加封して下総古河に移り、後宇都宮に帰封す。其後属々転封し、昌敦に至り通封十万石に至り、豊前中津城に移封す。爾後六世相伝へて昌服に至り、王政維新となり致仕して昌邁嗣ぐ。

貞能より昌邁に至る十五世三百十余年なり。明治二年六月昌邁中津藩知事に任ぜらる。」

奥平藩の歴史の概略は以上のごとくであるが、今春から放映が始ったNHKの大河ドラマ『徳川家康』に、奥平美作守がしばしば登場して、お茶の間を賑わしている。よって平凡社版『大日本人名事典』から、奥平信昌の伝記をここに写して、徳川家と奥平氏との関係を鮮明にしておこうと思う。

奥平信昌（一五五五～一六一五）徳川家康の臣。弘治元年生る。初名定昌。一に貞昌に作る。通称九八郎。貞能の子。初め父と共に武田氏に属し、その妻を勝頼に質とした。天正元年父と共に徳川氏に帰降し、宮崎滝山に拠ってしばしば甲州人を伐った。勝頼怒って信昌の妻を磔殺した。家康乃ちその九月長女亀姫を定昌に嫁し、長篠城を抜いて定昌をしてこれを守らしめた。天正三年五月朔、勝頼歩騎二万を以て来り囲む。定昌死守して下らず、粮乏しく城兵大いに苦しんだ。時に鳥居強右衛門城を脱して急を家康に告げる。家康、織田信長と共に来り援け、定昌出でゝ大いに勝頼を破った。その年八月定昌岐阜にて信長に謁し、長篠の援を謝した。信長その勇武を賞し、諱の字を与へて信昌に改めた。そののち家康のために功多く、慶長六年美濃加納に十万石を賜ひ、七年その地に移り、元和元年三月歿。年六十一。

（野史）

奥平家の江戸上屋敷については、市史稿に、寛永一七年一一月二八日、宇都宮城主奥平忠昌（美作守）木挽町に邸地を拝領すと記してある。奥平家が江戸湊に臨む、枢要地区に、広大な邸地を与えられたのも、家祖貞能以来、信昌・忠昌三代にわたる軍功に対する賞賜であって、それなりの理由のあったことを、私は奥平氏の系譜を閲してこれを知った。

代々の藩主の中で、名君の誉高かった昌鹿という殿様のこと、島津重豪の第二子で、昌鹿の男昌男の後を継いだ昌高は、天資聰明、養祖父昌鹿の遺図を承けて、士民を撫育し、文武を奨励したが、侯自身いたく蘭学に興味を持たれ、和蘭語をあやつり、和蘭文字の名刺を持っておられたことなど、すでに第5号において記してしまった。ついて見られたい。

○先年刊行せられた、今泉源吉氏の大著『蘭学の家桂川の人々』の第三巻巻頭に、御浜奉行木村喜繁自筆本『伊豆の山ふみ』の挿絵が、原色版で口絵に戴せてある。役宅のある御浜御殿を出発して、長途の旅に出る御浜奉行の一行が、河岸沿いに延々と続く奥平家の土塀に添って歩いて行く姿が描かれていて、天保頃の奥平家の屋敷の容子の知られるのが我らにとってまことにありがたい。図は本考証一三（第26号）に載せておいた。おぼろげな写真であるが、昔日の姿をしのぶよすがとなるであろう。

第31　木挽町の諸問屋

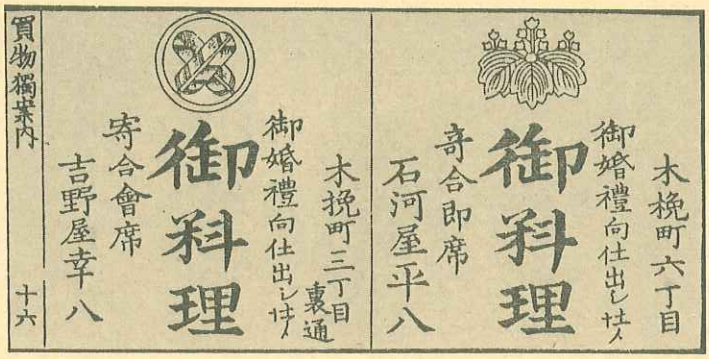
木挽町は町数こそ七丁を数えこそすれ、中心街から遠く離れた場末のことて、大商店に乏しかった。文政七年版の『買物独案内』をひとわたりひっくり返してみたけれども、捜し方が粗雑だったせいか、木挽町二丁目の「生布海苔芋屑苅問屋」大坂屋七兵衛の店一軒を拾い出しえたにすぎない。

ただ、周辺が武家屋敷だったので、

御武家相手の寄合料理屋が何軒かあったのが注意を惹いた。『江戸買物独案内』飲食部には、

御料理、寄合即席　木挽町六丁目　石河屋平八
御料理、寄合会席　木挽町三丁目裏通　吉野屋幸八
会席御料理　木挽町栄女ヶ原　酔月楼万彦

の店を載せ、どの店も「御婚礼向仕出し仕候」と註してある。嘉永元年版、『江戸買物独案内』（花咲一男編）



『江戸名物酒飯手引草』には、右の酔月楼のほかに、即席御料理屋として、木挽町七丁目の三河屋吉兵衛の店と、西応寺町の万屋喜兵衛の店を載せている。

地区の諸問屋を、嘉永の『諸問屋名前帳』から拾ってみたら一三三軒を数えた。場末の商店名を並べても興味が薄い。人宿と、飛脚問屋と、三組両替くらいを挙示して、あとは一覧表にして示すことにしよう。

人宿　一番組

木挽町三丁目与兵衛店　山形屋　重助
芝西応寺町代地家主　山形屋五郎助
木挽町三丁目鉄五郎店　神戸屋三次郎
木挽町五丁目上納地五人組持地借　松本屋四郎兵衛

仝　二番組

木挽町六丁目五人組持店　大阪屋伊三郎
仝右　大阪屋伊三郎方同居　奥州屋初右衛門

仝　四番組

松村町徳之助店　近江屋松五郎

仝　五番組

木挽町七丁目市右ェ門店　松川屋勘右衛門
同町三丁目重次郎店　近江屋万右衛門

仝　六番組

木挽町二丁目平次郎店　和泉屋九郎兵衛
同町二丁目家持　長谷川　与八
同町七丁目市右ェ門店　和泉屋文太郎
同町一丁目善次郎地借　武蔵屋重四郎
同町六丁目半五郎地借　与三郎

仝　七番組

松村町藤助地借　但馬屋弥三郎
（慶応三年四月転宅、木挽町一丁目家持）

六組飛脚屋（京橋組）

西応寺町代地、政吉店　越前屋治兵衛
木挽町二丁目庄次郎店　越後屋　好平
同町三丁目、卯八店　神戸屋三次郎
同町三丁目、吉蔵店　丹波屋　市助
松村町、藤助地借　越前屋　清助

仝（山之手組）

木挽町六丁目武兵衛店　万屋　太助

三組両替（十三番組）

同　木挽町七丁目清兵衛地借　堺屋　嘉兵衛
同　同町六丁目栄吉地借　大和屋与兵衛
同　同町四丁目続氷川屋敷　小西屋惣兵衛
同　同町三丁目弥兵衛地借　遠州屋徳三郎
同　同町三丁目利右ェ門地借　伊勢屋三郎兵衛

木挽町の諸問屋分布

	松村町	木挽町一丁目	〃二丁目	〃三丁目	〃四丁目	西応寺町代地	木挽町五丁目	〃六丁目	〃七丁目	計
人宿	2	3		3		1	1	3	2	14
飛脚組六京橋	1		1	2		1				5
同山手組								1		1
三組両替				2	1			1	1	5
炭薪問屋					1				1	2
炭薪仲買	6		1	4	8	1	8	5	3	37
地廻穀問屋米			1				2	1	3	7
春米屋	3	2	6	8	1	2	5	5	10	42
脇店八ヶ所米屋	1									1
地廻塩問屋							1			1
温飩杜氏宿							2			2
紺屋	1	1	1		1			1	1	6
地漉紙仲買		1		1		2				4
住吉組荒物問屋		1								1
版木屋			1	3				1		5
合計	14	8	11	23	12	7	19	18	21	133

炭薪問屋や舂米屋がやたらに多い木挽町で特色のある店は貸船屋であり、船宿であったろう。木挽町の貸船屋については、『新撰東京名所図会』に、

祝橋の際に貸船宿あり、河内屋（木挽町二丁目）丁字屋（同上）小林（同三丁目）山口（同上）の四戸にて橋の左右に在り、網船釣舟を貸す。ボート、屋根船幾艘となく河岸に繋ぎたり」と記している。

○新木挽町の成立

一時期東銀座と呼ばれたことのある木挽町地区は、すでに観てきたように旧幕時代には過半の地が武家地であったから、維新後、政府の接収した場所以外には、まだ邸宅を構える旧大名家や、政府の高官宅があった。

この地区は、明治五年二月二六日、鍛冶橋御門内元会津屋敷から出火した大火で、一円焼野原となり、この年八月の武家地寺社地整理によって、新たの町名区画が定まった。その年九月、紅英堂が出版した「官版東京区分町鑑」に、

木挽町壱丁目　伊達宗徳邸、同宗敬邸、松村町板垣退助邸、其外小屋敷合併

同町二丁目　亀井茲監邸合併。

同町三丁目　由利公正邸、其外小屋敷合併。（以下略）（市53―三六四頁）

と記すごとくで、『東京府志料』にはなお爾余の町の沿革を記して、

木挽町七丁目　此町は旧来町地なりしが、明治五年二月火災に罹り空地となれり。同七年に至り、石造商社を築き、人口を成せり。

木挽町八丁目　此地はもと中津・山上・川越・新発田四藩の邸地其他小邸あり。明治五年上地となり、新に町名を加へて八町目とせしを、同七年又割て三分し、六町目七丁目間の小路通りより南を八丁目とし、五丁目六丁目の間の通より南を九丁目とし北を十丁目とす。今此町は電信局倉庫となる。（私註、戸数人口を記さず）

木挽町九丁目　沿革八丁目に同じ。

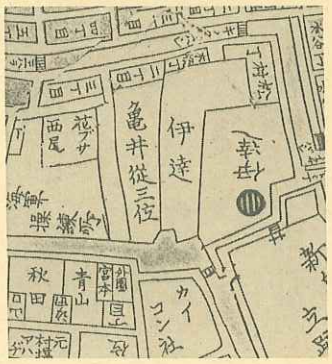
〃　十丁目　同上、今大蔵省用地となる。

と記している。

○亀井家と亀井橋

明治四年に版行された『東京大絵図』を見ると、木挽町二丁目の東続きの広大な地所に「亀井従三位」と記してある。前に「西尾隠岐守」の邸地だった所である。

若木虎雄氏の「鷗外研究年表」（雑誌「鷗外29」）によると、津和野藩主亀井茲監は、明治四年五月二二日廃藩の議を上り、津和野藩知事の職を辞し（九月十日、旧藩主亀井茲監、一家をあげて東京に移る）と記録している。



『東京大絵図』（明治四年）

東京へ移住した亀井家は、木挽町三丁目に邸地を購入した。（移住以前に土地購入手続きをとり、新邸も建築しておいたかも知れない）亀井家には、木挽町邸の洋館設計図が残っているそうである。（雑誌「鷗外29」）

しかるに、亀井家移居後まだ席も暖まらぬに、翌五年二月二六日に起った例の大火で、亀井邸も隣町にあった由利公正邸も類焼してしまった。

明治七年刊行の『東京独案内』を見ると、華族亀井茲監の住居は、木挽町になくて「第十一大区一小区須崎村五十五番地」となっている。七年には住居を下屋敷に移していたようである。あるいは、木挽町には地所を残して貸地してあったかも知れない。

前記若木氏の年表に、「亀井家下屋敷は葛飾郡向島小梅村にあり、明治五年六月二五日に上京の途に上った森林太郎（後の鷗外）は、七月某日東京に着き亀井家下屋敷に落ちつき、八月下屋敷に近い小梅村八十七番地に家を借りて移った。」と記している。

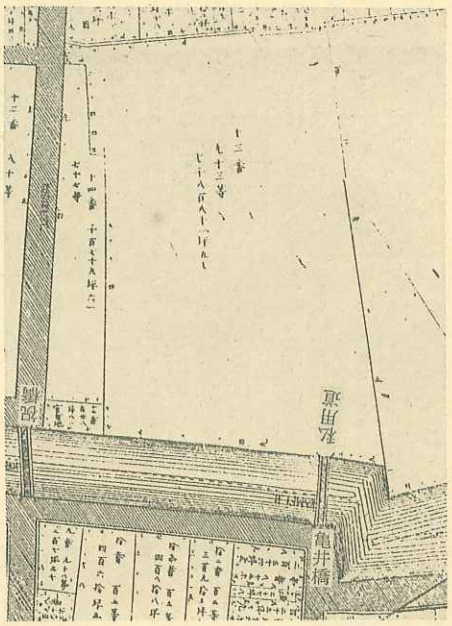
亀井家は何年まで木挽町に居住していたのであろうか。石川悌二氏の『東京の橋』（一七三頁）に、亀井橋に註して

明治五年四月の銀座大火にこのあたりをも焼きはらったが、同年十月になって、旧津和野藩主伯爵亀井茲常から、自邸の裏手築地川に私費をもって橋を架設したいという願書が東京府に提出されているので、おそらくこれが亀井橋の創架であろう」

と書いている。東京都公文書館所蔵文書の中に、その願書が存しているとみえる。

明治五年当時、木挽町二丁目と、境界を接する三丁目との間の道路はまだ開設されていなかった。

明治七・八年版、松浦宏の『東京大小区分絵図』を見てもこのことは明らかである。明治八年二月一五日、東京府は内務省の指令を受けて、同所の東西に通ずる新路線を開設し、二丁目の河岸沿いに道路を新設するむねの通達



『東京全図　京橋区』（明治十二年）
西川光通編（三康図書館所蔵）

願済之処、先般落成仕候」と前置して、

一、明治九年十月廿八日着手
一、同年十二月二十日落成
一、金千弐拾九円五拾壱銭
六厘　入費

右之通御座候。此段御届仕候也。

明治十年二月

右

第十一大区一小区須崎村五十五番地居住
従五位亀井玆明後見
従三位　亀井玆監　印

東京府知事　楠本正隆殿

（市59―二六六頁）

を出した。（市57―二九四頁）が、どういう理由であったか、その年一二月二五日の布達で、先の道路新設計画を取止め、道式にかかる土地に地券を交付するという布達を出している。（市57―八二二頁）

明治五年一〇月に亀井家が提出した新橋私費架設願いが、なかなか許可にならなかったのも、右の路線新開の問題もからんでいたのかも知れない。

東京市史橋市街篇第五九（明治期10）に、明治一〇年二月に亀井玆明が提出した「架橋落成届」が載せてある。

届書には「第一大区十小区木挽町二丁目邸内新開町ヨリ築地渡橋架、兼而し、また近隣町家は軒ごとに地口行燈をかかげて参詣人も群集した。という記事が載せてある。

旧津和野藩主亀井氏が、木挽町・築地地区の発展に大きな寄与をしていることを地区の人々は忘れてはならないと私は思う。

とある。

余談にわたるけれども『新聞集成明治編年史』明治一二年の条に、六月一八日の「東京曙新聞」に、木挽町二丁目華族亀井邸稲荷の祭日につき、昨今両日、竹本常盤津連中で踊り家台を出

受贈資料

毎年。多くの方々から地域に関する資料を寄贈していただいていますが、その中から三点程紹介します。

平島二郎氏
「家賃地代受取帳」
京橋区山下町一一番地の平島家所蔵の文書で、明治二五年から二八年までの家賃・地代等の受取記録。

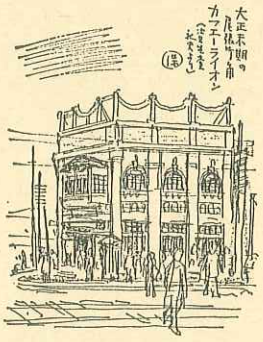
勝又康雄氏（銀座金春通り会会長）
「東京市京橋区全図」大正八年版
逓信協会発行の郵便地図の大正年代版。昨年話題となった金春館が図中に明記されている。

常山源太郎氏
「西銀座・金春館小史―大正2年より大正12年大震災まで―」
常山氏が数年がかりで調べあげた金春館年代記。

◇ 東京を語る会 第39回

日時　七月九日（土）
　　午後二時～三時三十分
演題　銀座ばやし
講師　永井　保　氏
　　（画家）

永井保氏は大正四年日本橋のお生れで、震災後、築地に移り銀座を五十年見てこられました。

『銀座ばやし』は、銀座百点に連載され、後に銀座通りのスケッチ等を収めて、刊行されています。漫画、童画、油絵を手がけられ、『新しい東京』『東京みてあるき地図』他のご著書があります。

なお、五月十六日～七月十六日の期間、築地社会教育会館の郷土資料館において、「銀座の路地の写真展」（藤森秀郎撮影）が開かれています。併せて、お出掛け下さい。